



AIと読解力

E2 池田知隆(ジャーナリスト)

「学校で1から100までよく教えていると思うよ」
教育ドキュメンタリー番組をつくっている知人のディレクター
がしみじみと語り、こう問いかけてきた。

「でもね、0から1についてはどうだろうか？」

どうやら基礎的な学びの力、いわゆる読解力の低下が気になっ
ているらしい。「そだねー」と私にもピンときた。企業経営者か
ら「若い社員は取引相手のニーズを理解するのに時間がかかる。書
いてくる報告書も要領を得ない」といった悩みをよく聞くからだ。
社員の基本的な言葉の使い方に頭を悩ます会社も少なくない。

いま話題になっている本、新井紀子著「AI vs 教科書が読め
ない子どもたち」(東洋経済新報社)がおもしろい。著者は国立情
報学研究所教授で数学者、東大合格を目指すAI(人工知能)「東
ロボくん」の育ての親として知られる。AIの可能性と限界、人
間との関係の未来を実にわかりやすく語っている。

東ロボくんは東大には入れなかった。だが、MARCKHクラス
(明治、青山学院など)には楽勝で合格した。それが意味するの
はなにか。AIが苦手な分野は読解力で、日本の教育が育ててい
るのは、今もってAIに代替される能力というのだ。これからの
AI社会を乗りきるために新井教授はこう提言している。

「重要なのは柔軟になることです。人間らしく、生き物らしく
柔軟になる。そして、AIが得意な暗記や計算に逃げずに、意味
を考えることです」

母校の有明高専は2年前、創造工学科一学科に改組された。新
入生全員が入学後から1年半、技術全般に関する基礎的素養を学
び、工学への動機づけをしているという。すぐにその効果が表れ
るものではないが、その狙いは大賛成だ。そして半世紀前、母校
で受けた教育を懐かしく思い出した。

「あの国語の授業で半ば強制的に本を読まされた棚町知彌(恩
師の名)式『読書教育』もまた、読解力をつけるための先進的な
取り組みだったのだ」